

難波西鶴と

海の道

【73】

「これがおもしろいから」

「昔、菅原道真が亡くなった後、遺愛の梅の花が太宰府まで飛んだという故事のように、世之介は博多まで飛んで行き、博多の遊郭・柳町に出かけた。ここに

森田 雅也

前回、「博多小女郎」の話を中途半端にあげてしましました。海外との貿易で常に歴史の先頭にあった博多商人。近世に入っても活気づいていました。

功績により幕府から妓長を拜命したとされます。以来、それが「博多小女郎」として固有名詞となり、伝説の美人で気丈な遊女「博多小女郎」を生み出します。さて、西鶴の『好色一代男』(天和2(1682))から出入りしなくてはなら

海運で栄えた港には必ず、大きな遊女町がありましました。博多では柳町(現在の福岡市博多区)にありましました。その柳町の遊女たちを「博多小女郎」と呼んだ

「都より飛梅、筑前の柳町を見にまかりぬ。昔は博多小女郎と申して冠気者ありける。人の命を取つて袖島に行つてしまいます。何か大げさなようですが、まんざら、この柳町の情報はフィクションとも言えませ

江戸初期の慶長(1596~1615年)のころ、この柳町に、ある小女郎がおり、唐人たちの乱闘を押し

「都より飛梅、筑前の柳町を見にまかりぬ。昔は博多小女郎と申して冠気者ありける。人の命を取つて袖島に行つてしまいます。何か大げさなようですが、まんざら、この柳町の情報はフィクションとも言えませ

さえ、その首領を捕らえた

かも武士はとがめ侍る。い小学館の『井原西鶴集

乱闘劇で「伝説の気丈な美女」に

(1)『好色一代男』の頭注によれば、「遊客は申の下刻(午後5時ころ)切にて客をかへし、夜陰に留めず。腰の物帯する時は入口の番所を通さず。」(色道大鏡・博多柳町)。寛文8(1668)年12月の出火以来、夜見世を禁じた」とあります。ただ、この厳戒態勢に「博多小女郎」が直接絡んでいるかどうかは不明です。

前回、近松岡左衛門の浄瑠璃「博多小女郎波枕」(享保3(1718)年11月大坂・竹本座初演)を紹介しましたが、長崎で当時、実際に起こった密貿易事件を扱っているところから、ここで女主人公は、西鶴の言う「博多小女郎」とは別人と言えるでしょう。それにして博多の女は強いですね。

(関西学院大学文学部人文言語学教授)

元は普通名詞だった「博多小女郎」